

75 75期リレーエッセイ

弁護士登録二年目を迎えて

会員 齊藤 健太郎



1 はじめに

この度、縁あって75期リレーエッセイの執筆をすることになりました。私がこの記事を執筆しているのは令和5年の12月で、ちょうど登録から一年を経過したことになります。

私は、平成8年に北海道で生まれ、紆余曲折を経て小学生の頃に東京に引っ越してきました。その後、法科大学院を修了して令和4年晴れて弁護士として登録しました。幸いなことに周囲のサポートもあって滞りなく試験は通過することはできましたが、そのせいで社会経験も少なく（アルバイトくらいはありますが）この業界に飛び込むことになりました。そんな私の弁護士一年間を振り返っていきたく思います。

2 失敗だらけだった一年間

過去を振り返り、うまくいった瞬間を思い出すことができるといいなと思いますが、改めて振り返ってみると、この一年間は失敗が目立つ年だったと感じます。

例えば、所内での連絡が上手くいかず、不適切な説明をしたことによってお客様を怒らせてしまったことがありました。

また、相談時に聞き取った事情が不足していたため、後になって新しい事情が判明し、急遽契約内容を変更しなければならない事態にも見舞われました。

依頼者との連絡がスムーズにいかず、トラブルが起きました。その際は、自らの短絡的な感情や判断が事務所の評判を下げかねないことになってしまい、

依頼者ともっとコミュニケーションをとっていればと後悔することもありました。

事件の現場に赴いた際、本来撮影すべきだった状況を撮影せず、インパクトに欠ける証拠で期日に臨んでしまったこともありました。

こうしてみると、もう少し所内での確認をしていれば、もう少し相談時間を確保してあれば、もう少し粘り強くコミュニケーションをとってあれば、もう少し足を動かして現場を巡ってあれば、と自分がもう少し頑張っていればという失敗が次から次へと浮かび上がります。

昨今、弁護士業もサービス業と言われるようになりましたが、他の弁護士との仕事の差が一見してわかりにくいため、目の前の事件に真摯かつ全力で取り組むことが不可欠であると改めて認識します。これらの失敗を教訓にし、将来に向けてより高品質なサービスを提供できるように、日々努力していかねばならないと改めて反省するところです。

3 弁護士二年目を迎えるにあたって

この一年で様々な経験を積んで、自分の力量が向上したと感じる部分もあります。

一方で、この文章を書きながら、修習時代に受けた弁護士からの忠告を思い出しました。「弁護士は、登録から10年間は弁護過誤だと思って業務にあたれ」という言葉です。

まだまだ未熟な弁護士であるという自覚のもと、この言葉を心に刻み、慢心することなく、二年目の弁護士として着実な成長を遂げていきたいと考えています。